



〈I〉「帰りたい」とは、ないものねだり的にユートピアを願う感情である。

少し退屈な〈現実〉から遠ざかることを願い、今より輝いている（かもしれない）〈理想〉に近づくために、我々はユートピア的なイマジネーションに心をときめかせる。しかし、その〈現実〉と〈理想〉が時間経過や慣れによって反転することは容易に想像でき、暫定的なユートピアを「家」として固定することはあまりにも欲望的すぎる。

〈II〉いつも通り道や通り方が違うだけで、その日が特別だったかのように錯覚する。

「今日は、雨が降っているし疲れたからタクシーを呼ぼう。」
「今日は、少し酔っているから風を浴びてゆっくり歩いて行きたいな。」
「今日は、時間があるからこの大きな運動公園を通ってみよう。」
「今日は、友達の家に忘れ物をしたから寄って、一緒にご飯でも食べていこう。」

〈I/II〉この住宅は、複数の通り方とその先の小さなユートピアを用意する。

確定的な玄関はない。入れそうな開口と、それへ導く通路のようなものを準備する。例えば、庭先の祖母に声をかけてベランダから上がるよう、サンタクロースが煙突から侵入するように、住まい手はその日の気分や出来事に応じて「今日の通り方」を選択し、毎日異なる一日の終わりを、自ら演出していく。今日のユートピアに向かうために。